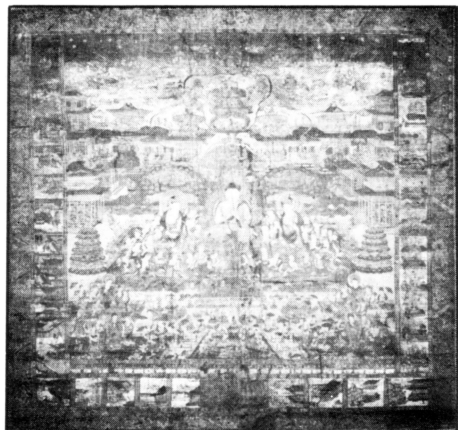


みかえり 第18号



絹本着色 当麻曼荼羅図（重要文化財）

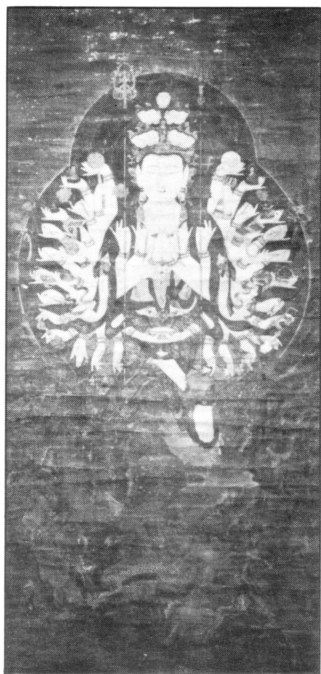
人は嘗^{いと}みしげくして 日ごと夜ごとにその命 滅^はび去^きるをも覺^{さと}り得^えず
風にゆらるる燈^としびの 消えなんと
する如^{ごと}くなり。住^{かた}み難^{がた}くして六道^{ろくどう}を
行くへもわかずさまよえり。

——善導大師ご法語

（大木 惇夫氏訳）

られて、「今からまだ働かせてもらうのだな」と考えているうちに、そのまま死の入口に運ばれている、という寸法です。
風前の灯^{ともしび}とはよくいったもの。刻一刻とすぎ去る人生を、快樂のみを求めてあくせくする私たちの姿こそ、自分で自分の足にわらじをはかせていることになりませんか。「欲望」という名のわらじをはきかえて、さまよい歩く人生の何というむなしさ……。

屈殺場^{くつころしやう}に引かれていく牛は、本能的にその一町ほど前でピタリと動かなくなるという。そんな時、ばくろうは牛の足に新しいわらじをはかせると、牛は不思議に歩きだすそうです。牛にしてみれば、古いわらじを新しいものと取りかえ



千手観音像

善導大師ご法語

父母は世間^{せけん}における福田^{ふくでん}
(福德を得る田地^{さじ})の最たる
ものであり、仏は出世間^{しゅつせけん}に
おける福田の最たるもので
ある。

「心から子を思わぬ親はない。心から親を思う子は少ない。」とは本当のようです。子は成長するにつれて妻を愛し、我が子に親しんで、父母に対してはかえって憎しみや嫉みを生じ、父母の恩を忘れてしまふものもあります。

「おまいのしせ(出世)にわみなたまげましたわたしもよろこんでおります……はやくきてくださいさいしょ(一生)のたのみであります……なにおわすれてもこれはわすれませんさしん(写真)おみるトいただいておりますはやくきてくださいさいつくるトおせてくださいこれのへんち(返事)おまちしてを

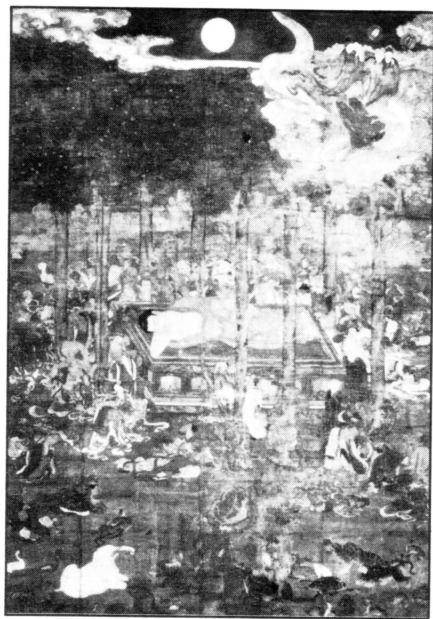
りまする……」

これは

野口英世博士のお母さんが博士に出した手紙です。字を知らない母が精一ぱいの努力をして書かれたこの一字一字には愛情がにじんでいると博士は涙を流してよまれたにちがいありません。

父母の恩に報いて考養を尽さないならば畜生となんら異なるところがないのではありませんか。

みかえり 第20号



煩惱^{ぼんのう}深く底^{そこ}いなく 生死^{しょうじ}の海^{うみ}は涯^{はて}も
なし 苦^くを渡^{わた}る船^{ふね}まだ発^たたず など
眠^{なみ}りをばむさぼるや。励^{たげ}く勤^{つと}めてい
そしみて 心^{こころ}を西^{さい}に定^{さだ}むべし。

——善導大師ご法語・初夜無常渴——

(大木 惺夫氏訳)

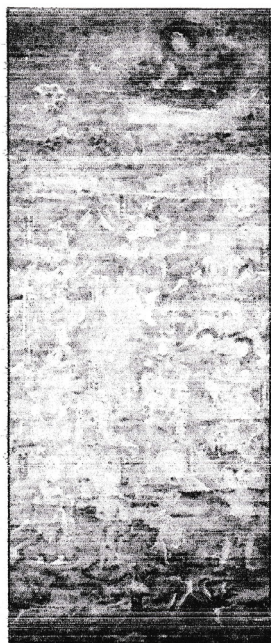
仏涅槃図(重要文化財)

「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」——人生のどん底で、あらゆる辛酸をなめつくした林芙美子が、「人生は苦だ」とひらき直った時から文学者として大きく飛躍したといわれています。彼女の作品が私たちの心を打つのは、「人生は苦なり」という真理を体解した彼女の魂の叫びだからでしょう。

念仏を唱えると苦しみがなくなるわけではありません。しかし、念仏を称える歓こびが増大すればするほど、苦しみは問題でなくなってくるはずで、苦しみに直面した時、顔をそむけず、じっと苦をみつめる心を大切に生きてゆきたいものです。

総本山 永観堂禪林寺

みかえり 第21号



二十八部衆像（千手観音の眷属）

総本山 永観堂 禅林寺

「是心是仏」（是の心、是れ仏）
という意味は、心が仏を想念すれば、その想念によって仏身が現われるということである。
すなわちこの心が仏であり、この心を離れて、別に仏がおられるわけではない。

中国浄土教の御祖師であられる
——善導大師様のご法語——であります。

昔このような話を聞いたことを覚えています。
新助どんという下男のご主人は、大変なお金持ちで「金」でできた仏さまをもっていました。しかしお仏壇の奥にしまい込んで、あまりおまつりもしませんでした。

新助どんが毎日拜んでいる仏さまは、山で拾ってきた「木」の仏さまでした。
ある日、この金仏さまと木仏さまがすもうをとることになり、皆がご主人の金仏さまが必ず勝つと思っていました。ところが、金仏さまは次第に汗を流し、とうとう押し倒されてしまいました。

この金と木の二体の仏さまに変わりはありません。しかし、二人の心に大きな差があったようです。私たちが仏を念じる心がそのまま仏さまなのです。その意を
西山上人は、
「南無阿弥陀 ほとけのみ名と思いに
称うる人の 姿なりけり」
とよまれたのです。

みかえり 第22号

南無なむというは、

即ちすなわちこれ歸命きみょう、乃至

阿弥陀仏あみだぶつというは

即ちすなわちこれその行ぎやうなり。

この義ぎをもつてのゆえに、
必ず往生おうじやうすることを得う。

善導大師ぜんどうだいしご法語ほふごより



二十八部衆像（千手観音の眷属）

南無なむというのは、私たちが阿弥陀仏にすべてをおまかせする心といい、阿弥陀仏あみだぶつというのは、そういう私たちを一人も洩らさずちぎに摂め取とってくださる無量の働きをいいます。したがって「南無阿弥陀仏」という六字の番号は、阿弥陀仏の側から言えば、南無の私たちをしつかりとその胸に抱き上げること誓願せがんとして、それを果された阿弥陀仏の覚りに他なりません。一方私たちの側から言えば、この番号は私たちの往生が果された果号よくごなのです。

ですからこれをわが国で欣よろこび表わし、阿弥陀仏の慈悲を体解たいげすること、これが念仏ということであり、今生こんじやうから未来にかけての救済なのです。

唐の善導大師のこの教えを日本で初めて弘められた方こそ、わが法然上人です。

総本山 永観堂禅林寺

みかえり 第23号



薬師如來像（重要文化財）

弥陀のおん身とみ心は

あまねく四方の諸人の

想いの中に現る。

ひたすら慕いまいらせて、

まさしく映せ、

みすがたを。

——善導大師「日中礼讃」（大木惇夫譯）より

「目に見ることができないから、仏なんて信じられない」という人がいます。

それは、アンテナも、テレビ受像機もなく、テレビ放送を否定するようなものです。

つまり、電波そのものは目に見ることができないので、電波なんてない、と言うようなものです。

テレビ電波のように、阿弥陀さまのお姿もお教えも、私たちのまわりに隈なく満ちみちているのです。それをキャッチするための受像機、それこそが「念仏」です。

心をこめて、なむあみだぶつとなえれば、私たちの心のブラウン管には、みほとけのお姿が、慈悲の光をはなつて、ありありと現われてくださるのです。

総本山 永観堂 禪林寺



自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、
 眩劫よりこのかた常に没し、
 常に流転して

出離の縁あることなし。

かの阿弥陀仏、四十八願をもて

衆生を攝取したもう。

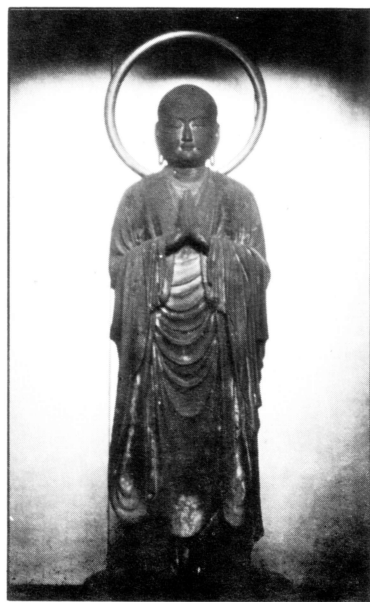
——二種深心のこと——善導大師

日本語の敬語に「謙譲」と「尊敬」というのが
 ありますね。ともに相手を敬つていう表現で
 すが、相手をそのままにして自分がへり下る
 のが「謙譲」ですし、自分をそのままにして相
 手を上にするのが「尊敬」です。

ところが善導大師は、阿弥陀仏と私とが対
 待するときはそれでは不十分だ、「謙譲」と
 「尊敬」とを具備することが必要だとおっしゃ
 るのです。

御文では、「謙譲」は自分の力量の無さに目
 覚ることですが、それでは自己嫌悪に陥るだ
 けでしょう。そうであればある程、この私を
 救い上げてくれる存在が必要です。その方こ
 そ「この私」を救わんがために仏となられた阿
 弥陀仏なのです。その方を思うにはどうして
 も「尊敬」でなければなりませんね。しかも疑
 いや計らいを捨て去った「尊敬」でなければな
 りません。私が往生できるかどうかは、この
 疑い・計らいを捨てるにかかっているから
 です。

みかえり 第25号



善導大師像

如来のすがた妙にして、
世には等しきものあらず、たぐえもあらず、
不思議なり、さればぞ今し拝める。
如来の御身尽くるなし、
その智慧もまた極みなし、
法もなべて変わるなし、さればぞわれは帰依す
なる。

— 日没礼讃・大木惇夫譯より —

杯さかずきに一杯の水を海にそそいだならば、その水は、海と一体となることでしよう。私たちも、わずか60、70年の生命が終ったとき、此べるものがないほどすばらしく、しかも永遠に変わることのない「大きな生命の海」と一体となることができるのです。

大きな生命の海——それこそが阿弥陀仏なのです。み仏の姿も、そのお体も、智慧も、教えも、永遠に変わることもなく、まったく無制限に私たち一人一人の小さな生命を、救いにつけてくださるのです。

私たちは、どうしてこの大きな力に背を向けることができましょう。

総本山 永観堂禅林寺

慈心相向

いつくしみの心で
人にあい向い

仏眼相看

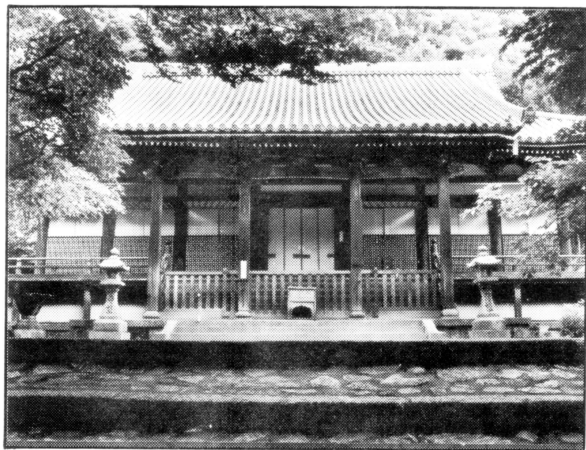
やさしいまなざしで
みつめあう



うかつに人を信じられぬ世相であればこそ、
できるだけ人には親しく接せよ。そして己れに
はできるだけきびしく辛く接せよ。ともすれば
逆に自分を甘やかす。反面、人の欠点をあげつ
らいろくに挨拶もせぬ日本人がますます増えつ
つある今日、「人には親切に、自分には辛切に」
とは実に味わうべき言葉です。又念仏者の大切
な心がけと申せましょう。

「教えには深切に」。人生にはこれでよいという
結末などないように、仏法も聞けば聞くほど義
理深く、汲めどもつきぬ大海のよう
なものです。「仏法の大海は信をも
って能入す」と言われるように、仏
の教えを深く信ずる心に、明るい人
生が展開されてくるのです。

いつくしみの心で人にあい向い
やさしいまなざしでみつめあう。
それこそ浄土であると善導大師は教
えられるのです。



阿弥陀堂（屋根瓦修復完成）

寂滅の樂みを求めんと欲すれば
當に沙門の法を學すべし。

衣食身命を支へ、精麁衆に随つて得よ

孔子は「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と申されました。私共は道を求むる為めには何ものを犠牲としても、惜ま

ない覚悟を持たねばならぬ。

四句の偈「諸行無常 是生滅法、生滅々已 寂滅為樂」を聞かんが為めには我が一身を鬼人に供養なされたというも此の間の消息を遺憾なく發揮しております。要するに道を求むる為めには何物をも犠牲として惜むことなく、至誠と熱烈と真剣であらねばならぬ。

真の「寂滅の樂」永劫の生命と無窮の喜びを求むる為めには、衣食的生活のみの為めにあくせくとして、唯単に物質の奴隸となり、物の為めにとらへられた人々の前には永久に、無窮の樂は得られないのであります。衣は寒暑を凌げば足り、

食は生命を支れば足り、

住は雨露を凌げば足りる。

（倉橋旭靜著 無常偈を通じて見たる高祖の人生觀より）

総本山 永觀堂禪林寺

—母のない子は、そっと泣く—

佛の

大悲心を

学ぶ

(善導大師のおしえ)



永観律師像

「母のある子は人の前で泣く。母のない子は人にかくれてそっと泣く」。母のない子は、泣いてもとんできて抱いてくれる親がいないと知っているから、人に知られぬようひとりで泣きます。

「悲」とは「うめく」という意味があるように、悲しい時、私と共に泣き、私の痛みを自分の痛みとして受けとめて下さるのが仏の大悲なのです。

『観無量寿經』に、「仏身を觀るをもつてのゆえに仏心を見る。仏心とは大悲悲これなり」と説かれています。仏さまとの出会いを一心に念じて、大ぜいの人のしあわせにつながりような生き方をしていると、仏さまは慈悲というはたらきをもって仏心を見せて下さる、ということです。

仏は衆生の苦悩あるところに宿りたまう——時には花となり、時には風となり、時には人の情となって、共に泣いて下さる——これが仏の大悲です。

…たつた一度しかない人生を…

畢命 いつ みよう

期と為す ご な

(善導大師のおしえ)



火除の阿弥陀如来
(開山時の五智如来の一体、弘法大師作伝)

善導大師の人生觀の根底を流れるものは、
「生あるものは必ず死に歸す」

という嚴肅な無常觀です。と同時に、人の世が無常であればこそ今の私は二度とないわが人生を大切に生きよと、生涯かけて仏の慈悲を説きつづけられたのです。

念仏する者の心構えとして「四修」の教えがあります。
一、恭敬修（うやまいの心をもって）

二、無余修（いのちの親、阿弥陀仏とともに）

三、無間修（いつでも、どこでも）

四、長時修（命のあらんかぎり）

今日という日は二度とないのです。出会った時が別れる時です。その大切な今日という日を一期一会とうけとめて、いかに有意義に生きぬくか——。それは、うやまいの心をもって仏の大悲に生かされるしあわせを思い、あたえられたつとめに打ちこむほかない。と教えられています。